

あいち病害虫情報 最新情報

平成26年4月16日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

ムギ類赤かび病防除

ムギ類赤かび病の感染予防のための防除適期は、開花始期から開花期までです。

4月10日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月は平年に比べ晴れの日が多い見込みで、4月19日から25日の気温は、平年並又は低い確率が共に40%です。このため、感染の好適条件は少ない見込みですが、今後、赤かび病の防除適期を迎えるので、天候の推移に留意して、適宜防除を進めましょう。

水稻の育苗期防除

普通期栽培の播種作業が始まります。次の点に注意して適正な種子消毒に努めましょう。

- 1 細菌性病害にも効果のあるテクリードCフロアブルなどを用いて、種子消毒を行いましょ
- 2 浸漬処理法の場合、薬液温度は15～20℃とし、処理濃度と時間を守り、処理後、種子に薬剤を十分に付着させるためによく風乾しましょう。
- 3 温湯種子消毒の場合、適切な処理温度、時間（例：60℃、10分）を守りましょ
- 4 高温での浸種や長時間催芽は細菌感染を助長するので避けましょ
- 5 出芽温度は30～32℃を守りましょ
- 6 種子消毒後の廃液は、適切に処理ましょ。浸漬処理後の廃液処理が困難な場合には、種子粉衣（湿粉衣法）や塗沫法などの消毒方法に切り替えましょ。また、エコホープDJなどの微生物や農薬温湯種子消毒を利用する方法もあります。ただし、微生物農薬による種子消毒は、薬液の温度が10℃以下では効果が劣りますので、処理温度に注意ましょ
- 7 種子消毒後は病原菌の汚染がないよう管理ましょ

果樹カメムシ類の多飛来に注意！

果樹カメムシ（チャバネアオカメムシ）の越冬成虫量が、平成22年に次いで過去10年で2番目に多く、捕獲地点数も最も多かったことから、今後、ウメなどへの飛来量が多くなると予測しています。カメムシ類は、20℃以上で風が弱い夜に行動が活発になるため、注意してください。防除対策等の詳細は、平成26年4月4日発表の「平成26年度病害虫発生予察注意報第1号」を参照してください。

落葉果樹の病害虫

ナシ赤星病の冬胞子層が成熟してきており、降雨があれば、多数の小生子が飛散すると考えられます。開花後の防除を実施していない場合は、黒星病などとともに防除ましょ

ナシ黒星病は、4月上旬の巡回調査では発生を認めていませんが、降雨が続くと発生量が増加するおそれがあります。昨年の発生が多かったほ場では、特に注意しましょう。

ナシヒメシンクイの越冬世代成虫のフェロモントラップによる誘殺数は、平年並からやや多い状況で、発生時期はおおむね平年並です。越冬世代成虫は、展葉したモモの葉に産卵し、ふ化した幼虫が新梢に食入して芯折れを引き起こすので、防除適期を逃さぬようモモハモグリガとともに防除しましょう。

モモハモグリガの越冬世代成虫のフェロモントラップによる誘殺数は、今のところ少ない状況です。しかし、第一世代ふ化幼虫の防除適期を逃すと、その後の世代は生育ステージがばらつくため、防除が難しくなります。フェロモントラップによる誘殺状況とモモの生育ステージに留意し、落花1週間後を目安に適期防除を心がけましょう。

昨年、モモのせん孔細菌病の発生が多かったほ場では、感染を防ぐため薬剤防除を徹底し、春型枝病斑は見つけ次第、取り除きましょう。

果菜類の病害虫

ナスでは、ミナミキイロアザミウマの発生がやや多い状況です。アグリメック、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤などで防除しましょう。なお、農薬散布に当たっては、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション防除を心がけましょう。

ウイルス媒介虫を施設外に出さないようにしましょう！

トマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病の防除対策の基本は、ウイルス媒介虫を、施設内に入れない、施設内で増やさない、施設外に出さないの3つです。

特にこの時期は、次作の感染源を減らすため、トマトでは収穫終了後、残さを持ち出す前に施設を密閉して、トマト黄化葉巻病ウイルスを媒介するタバココナジラミを死滅させましょう。

キュウリでは、収穫期間中、キュウリ黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底しましょう。

- 農薬は安全な場所に鍵をかけて保管しましょう。
- 防除の際は、周辺作物に飛散しないよう注意しましょう。
- 農薬散布後は、防除器具のタンクやホースも洗いもれがないようにしましょう。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-62-0085 FAX 0561-63-7820